

記録的な大寒波により、山科にも大雪が降りました。雪国の苦労を思いました。私たちの人生に、苦労や戦いはつきものですが、その中で最高の幸せにいたる道はどこにあるかということ、心に留めたいと思います。

やぐらの完成と兵法の達人

先週のキャンプ委員会に來られた伊奈先生の喬木教会は、現在、新会堂建築の最終段階です。リニア開通に伴って、現在の場所は高架下となり、周りの住居は殆ど撤退しているそうです。最初にその話が湧いてはや10年、教会の方々の祈りと苦労が忍ばれます。京都復興教会も、15年前にこの新会堂が与えられました。建築委員長の玉村兄の、感極まった祈りの言葉、その年のクリスマスに倒れた清水先生のお姿が、忘れられません。教会にとって、新会堂建築は、まさしくやぐらの完成です。それは苦難の連続ですが、建てあげられた完成の喜びは、それ以上の恵みです。

二つ目のイエス様の例え話も、今、現実味を帯びて感じます。ロシアのウ侵攻が昨年のこの頃に始まりました。当初は1週間で攻め落とせると考えていたようですが、もう1年になります。どちらかが降伏するまで、または和解を求めるまで、戦争は終わりません。どんな経緯があつたにせよ、戦争は愚かな選択であるという教訓を思います。しかし同時に、「兵法の達人」という言葉があるように、戦争という極限状態において、優れた判断や、鮮やかな知恵、勇気ある決断の極意が生まれ、国家の命運に大きく寄与することも、私たちは教えられます。人々に平和を取り戻した功績は、後世に大きくたたえられるでしょう。

私たちの人生においても、時に大きな転機が訪れます。そのような境遇におかれた時、人間にとって一番難しいことは、自分の考えを捨てるということです。氷でつるつるの道を、脇の柵につかまって恐る恐る歩く人を見かけました。同じように、人生の危機において、人は自分の考えにしがみつくのです。しかし、それは本当はその人を幸せにはしてくれないのです。人生の支えとして握りしめている手をゆるめ、神様のみ心を信じて歩み出す時、解放と自由な息吹がその人の中に入ってくるのです。

聖書は、神を愛し、その御心に従って生きること、これが自らの考え以上の最高の道だと示しているのです。もちろん、中途半端では怪我や事故の元ですが。

全部を捨てる計算

書道の先生が「書は、はみ出すくらいの気持ちで書いて、ちょうど良いのですよ、人間は意外とちゃんと自分でバランスを取るものですから」と言われました。人生はどうでしょうか。全部を捨てて、神を愛し、み心に従います、と決心することで、ちょうど良いバランスになるのではないのでしょうか。「ねばならぬ」と自分の考えに固執している間は、やはり本当の自由と解放の喜びは得られないのだと思います。